

『西村が好いだらう？』

かっいふ中に、俵は走り出した。最初に眼に映るのは、ところどころに空地のある、さびしい、おそらく汽車が出来たために開かれたものであらうと思はれる新開町であつたが、しかもそれもほんのわづかの間で、やがて灯が来た。賑やかな町の灯がやつて来た。

真直に突當つた。そこには小さな川があつた。橋がかゝつてゐた。しかし、それを渡らずに、川に添つて左に曲つて入つて行くと、次第に旅舎が多くなつて来た。二階、三階の大きな旅舎が――。そしてその突當つたところに、灯だの、橋だの、二階だのが混雑と巴渦を巻いてゐるのが明るくはつきりと見えた。そこに城の崎の大きな浴槽があるのであつた。

私の車は西村へと引込まれた。私はそこに大きな旅舎を發見した。私は奥の離座敷へと伴れて行かれた。

しかし、道後などと同じく、此處は全く總湯式であつた。何處の旅舎にも内湯といふものはなかつた。旅客は皆な湯札を買つて、宿の下駄を穿いて、そしてその前のところにある總湯に行か

なければならなかつた。私も着物を着改へてすぐ出かけた。

橋をわたると、すぐそこが總湯であつた。戸をあけて入る――忽ち大きな立派な浴場が私の眼に映つた。大きな鏡に反射した美しい灯の光、まごまごすれば滑りさうな石張りの廣間、そこで着物を脱いで、裸になつて、戸を排して入つて行くと、あたりは一面の白い茫とした湯氣――それが次第に大きな立派な大理石の浴槽になり、浴客達の白い肌になり、ひねりさへすれば湯なり水なりがお好み次第出て来る管の連続になつた。思はずはつとするほどそれほど浴槽は深かつた。

これは無論、道後や寶塚あたりを摸して拵へたに相違なかつたけれども、それでも新しいだけに、また金が多くかゝつてゐるだけに、規模も大きく、感じも好かつた。道後は道後でまた面白味があるけれども、その立派さに於ては、その氣持の好さに於ては、此、彼にまさること數等であることを言はなければならなかつた。

ある人の話では、この城の崎ほど中國筋にきこえた温泉はなかつたといふことであつた。昔は皆な遠くからやつて来た。はるばる中國山脈の高い山を越してやつて来た。そして一月も二月も

滞在した。従つて自炊設備などは、昔は非常に完全してゐたといふことであつた。安くゆるやうと思へば、いかやうにも安くゐることの出来るところであつたといふことであつた。播磨あたりからでも、『ひとつ、城の崎に湯治にでも行つて来るかな』こんなことを言つては出かけて来た。今でもさうした平民的のところはあるか、何うか？

二十六

城の崎から鳥取まで来る間は、多くは山村が、でなければさびしい海のほとりであつた。トンネルも澤山あつた。香住トンネルなどは、かなり長かつたのを覚えてゐる。

『鎧といふ停車場のあるあたりは、それでもちよつと好いぢやないか？』
かうある人に言はれて、

『さアね。ちよつと好いね。しがし、昔、汽車のない時分に、あそこを通つて見たが、随分ひどいところだつたね。大きな峠が三つも四つもあつてね。中々、日を重ねなければ行けないやうなところだよ。それから思ふと、今は便利になつたと思ふね』私はその時分のことを考へずにはゐられなかつた。

『それはさうでしたらうね……？ その時分はひどかつたでせうね？』

『何しろ四日も五日も車に乗らなけりやならないんだから……。それに、路だつて、えらい路
でしたよ……。私はそこを通る時、かういふ歌を詠んだ……。』

『何ういふ？』

私は聲を張り上げて歌つた。

岩つゝし

山藤咲きて

あら山の

中ゆく旅も

なぐさまれつゝ

『成ほど』

『實境ですよ』

『さうでしたらうな……。しかし、その時分はその時分で、また面白いことがあつたでせうな』

『それはありましたな……。汽車で通れば、ちよつと見て行くだけだけでも、あの湖山の池な
んか半日もその岸に添つて旅行して行きましたから……。何うしても、見やうが細かいです。
賀露港などにも行つて見ましたよ。』

『鹿野町は？』

『あそこは知りません。それよりも、あの湖畔から少し此方に来たところに、湯村ツて言ひま
したかな、小さな田舎の温泉がありますよ。そこに一夜泊りましたが、ちよつと面白いところで
した？』

『湯村？ あそこは好い。今は汽車からも、さう遠くはありませんよ。』

『少しは立派になりましたか？』

『設備ですか……。？ 設備は駄目ですな……。都會の人の氣に入るといふわけには行きますま
いな。あそこよりは、矢張東郷温泉の方が好いでせう？』

『養生館ですか？』

『さうです……。あそこも時に由つては、騒がしくつて困ることもありませんけれども、空いてゐる時は、ちよつとのんきで好いのですよ』

『さうですな……僕もあそこは好きです。何となしに、變つた氣持のするやうなところですか』
湖山の池のあの赤い松原、それに夕日がさしわたつたさまは何とも言はれなかつたことを私は思ひ起した。それに城の崎から東郷まで行く間では、例の鷲峰山の姿が旅客の眼を惹かずには置かなかつた。あのキラキラと日に光つた、襷の多い大きな山の姿！ ことに、その麓にある鹿野町、そこに残つてゐる山中幸盛の古蹟……そこには是非一度行つて見たいと私は思つた。

松崎の停車場で私は下りた。そこは平凡ではあつたが、何となしになつかしいやうな氣がした。何が私を惹いたか？ 何が私の心を惹いたか。その平遠な他の奇のない湖水か？ それともそこにわき出してゐるといふ温泉か？ それは何であつたか知れなかつたけれども、兎に角私には未だになつかしいところとして残つてゐた。

私は三面が湖水になつてゐる一室を思ひ出すことが出来た。湖を繞つた山の紅葉が美しく夕日

に榮えてゐたのを思ひ出すことが出来た。美作の生れだといふ色の白い、やさしい美しい女中を思ひ出すことが出来た。丁度それは秋の末で、あたりがしんとしてゐる。何の室にも客らしいものはゐない。手拭を持つて風呂場に入つて行くと、さきに加減を見に行つた女中が、腰をはしよつて、白い足を出して、そこに浸けてある綿布を出してゐた。

『大變なものが浸けてありまして……』女中はかう申譯をするやうにして言つた。

『何だね？ それは？』

『木綿で御座います……』

『染まるのかね？』

『左様で御座います……』

丁度伊香保木綿のやうに、樺色に色がついてゐるのを私は見た。

『此處等で賣り出すのかね？』

『いゝえ、家で致してをりますだけで御座います』

かう言つて女中は濡れた足を拭いてあがつて行つた。

樋から落ちる湯の音が静かに静かにきこえた。それがいかにも暮れて行く秋のさびしさを私に思はせた。私はじつと深く身を沈めた。

夜、おそく月が出た。それが何とも言はず美しかった。硝子戸だけなので、カーテンを寄せる、大きな月が向うの山の上に出て、キラキラとそのすぐ下の湖水にかゝつてゐるさまが、床の中に入つてゐながらはつきりと見えた。いかにも美しかった。丸でお伽噺の中にでもあるシインのやうな気がした。

否、そればかりではなかつた。その月の影は、終夜私の室の中までさし込んで來てゐた。夜中に便所に起きた時にも、二度目に湯に入りに行つた時にも、月は明るく銀のやうにさし込んで來てゐた。

二十六

松崎から御來屋を経て米子町へと下りて行く高原——この高原も私には忘れかねた。それを思ひ出すと、私は今でも出かけて行つて見たいやうな気がした。

それは伯耆の大山の持つた高原であつた。そこには曾てラバが流れた。従つて地味もわるく、草原萱原が一面につゞいてゐるやうなところが多かつた。たとへて見れば、淺間の裾、または富士の裾と言つたやうなところであつた。唯、他に異つてゐるのは、その地盤が高く、海岸が徒崖、または絶壁を成してゐて、ところに由つては、屹立つて海に面してゐるところなどがあるために、一種言ふに言はれない爽やかな心持を感じさせることであつた。

この間——里程にしたら七里近くもあつたらうか、汽車は松崎のトンネルを出てから、この高原の海に添つた部分を眞直に走つて、倉吉から赤崎、赤崎から淀江へと進んで行つた。

『美しいですな、大山は？』

『本當ですな……』

『船上山ッていふのは、何れでせう？ 御存しありませんか？』

『船上山ですか？ 名和長年の？ それならそれ！』と地方人らしい襟巻をした中年の男は指して、『そら、そこに、此方の右の肩のところに、瘤見たいにちよつと出てゐるところがありません。あれがさうです！』

『は、ア、あそこですか？ 船上山は？』

中年の男は猶ほ向うを指して、『丁度此下のところが名和港のあつたところになりますで……。そこから天子さまはお上りになつて、あそこにお出でになつた。何しろ、こゝらは皆なその名和の領分だつたさうですから……』

『ちや、隠岐も見えるでせうな？』

『さア……』と言つたが、その中年の男は、今度は海の方を透すやうにして見て、『あ、見える、

見える……そら……そこに赤い雲があるでせう？ その下に、薄く、薄く、見えるか見えなかがらるに見えてゐる！ 見えるでせう？』

『あ、見える、見える。微かに、かう山のやうになつて？』

『さうです、此方で見ると、一つになつて見えるけれど、あれで二つになつてゐるんです……。高い方が島前で、左になつてゐる方が島後です……』

『遠いですな、随分——』

『海上二十里——出雲の美保の關から十八里ぐらゐりますかな……。何アに、今日は空気が加減で、少し遠く見えるんです。よく晴れてゐますと、もつとぐつと近く、はつきり見えます』

『さうすると、つまり、あそこから小舟で此處におわたりになつたわけですか？』

『いろんなことが考へられますな……。ふむ、あれが隠岐ですか？』

その人はかういかにも感慨深いやうにして言つた。恐らくその汽車の中では——その高原を走

つて行く汽車の中では、何遍さうした會話がへり返され、何遍隠岐島が眺められ、また何遍船上山が仰がれるか知れないのであつた。海は時には灰色をしてゐることがあり、はつきりした碧を見せることがあり、また、茫と霞んで、そのなつかしい島山も全くその底に沈み果て、その髣髴をさへ認めることが出来ないやうなこともあつた。徒崖の下には、幅の狭い沙濱が發達して、そこに電信柱や並木松や、小さな驛などを持つた縣道が汽車のレールと並行してそのまゝ長くつづいて行つてゐた。磯では波が寄せては返し、返しては寄せた。

赤崎の停車場はよちつと私の心を惹いた。何故なら、そこにある松が美しくかつたからである。

松の中につゞいてゐる街道に夕日がさして、いかにも繪か何ぞのやうに見えたからである。やがて御來屋の停車場が來た。そこには、例の名和神社があり、元弘帝遺蹟と標石の立てられた御着船所があり、自分の家藏を焼いてそして決意を示したといふ名和長年の屋敷址などがあつた。

此處まで來ると、大山の美しい姿は次第に左に、左になつて、前には出雲の島根半島の脊髄を成した一帯の山脈が碧い碧い海を隔て、あざやかにあらはれ出して來た。美保の關の所在なども

それとさやかに指さされるやうになつた。

汽車の速度は急に早く早くなつた。次第にその大山の高原地を下つて、米子町へと向つて行つてゐるのであつた。大山驛では、その大山が丁度御殿場で富士でも仰いだかのやうに、かくすところなくはつきりと——はつきりすぎるほどあらはれて見えてゐた。

これから大社まで行く間には、例の中の海と宍道湖との美しい眺めがあるのであるが、汽車の窓からだけ見たのでは、何うも物足りないやうに私には思はれた。大社の参拜をさへすませれば、それで好いと言つてそのまゝ歸つて行つて了ふ人達もかなり多いやうであるが、それではあまりに惜くはなかつたか。旅客はもう少し細にこの古い出雲國を見る必要はなかつたか。少くとも松江で下りてあの美しい宍道湖を見る要はありはしなかつたか。

本當を言ふと、その湖水も船でわたつて見なければいけないのである。大社から電車で一畠薬師に行き、それから平田へ出て、汽船で松江までやつて來なければいけないのである。否、更に風景をあさつて歩く旅客ならば、杵築の海岸の稻佐濱から、舟を僦つて、その半島の西の突端日の御岬まで行つて見なければいけないのである。そして松江に來たら、そこにゆつくり落附いて、

湖に臨んだ旅舎で一夜とまる。そして都合が好かつたら、安來節でもきいて見る。勝子といふ上手な名妓がゐる筈である。そして猶ほひまがあつたなら、湯村温泉に行つて見る。もとは全く田舎の温泉であつたけれども、今は大分設備がよくなつて、都會の人達でも、さう不愉快には感じない位の程度になつた。

それから美保の關には是非一度は行かなければならなかつた。何故と言ふのに、そこも好いところではあるが、そこまで行く間が——中の海の眺めが非常に美しかつたからである。宍道湖もこの中の海がなかつたなら、その好い感じの半を失つて了はなければなるまいと思ふほどそれほど美しかつたからである。で、松江の大橋の袂から出る汽船で美保の關まで行く。その間には馬潟の水郷めいた堀割があり、大根島があり、一目に見わたされた伯耆の大山があり、嵩山があり、更に進んで境町の瓦葺粉壁があり、潮流の急な狭い瀬戸があり、汽船の常に碇泊してゐる埠頭があり、それから次第に外海に出て、左の山の上に、例の關の五本松を見て、そのまゝ、一種の歡樂郷美保の關に入つて行くのであつた。しかし、そこまで行つても、その半島の東の突端まで出か

けて行つて見るものは滅多になかつた。私は言つた。『美保の關に行つたら、是非そこまで行つて見たまへ……。決して後悔はしはしないから……。それに、路と言つたつて、そんなに遠くはない。二十五町ぐらゐと思へばまちがひはない。好いからなア、そこは？　つまり、その半島の山脈をぐつと向うに出て行つて見たといふ形になつてゐるんだからな？　そこに行けば、隠岐でも何でも實によく見えるよ……。日の御岬でも見えるには見えるが、それよりも一層よく見えるよ』

『そこには燈臺があるの？』

私のお話をきいてゐた友達はかう言つて訊ねた。

『あるんだ……。地藏岬の燈臺！　つまりここの突端と西の突端とで島根半島をくくつてゐるやうな地形になつてゐるんだからね……。その燈臺の後のところから見た海は、何とも言はれないよ』

『日の御岬と何方が好い？』

『さア、日の御岬も好いね。あそこも捨てられないね……。松が好いからな、あそこは？　し

かし、地藏岬の方には、大山がある。あそこから見た大山は何とも言はれない』

『それに、出雲には加賀のくけ戸とか何とか、非常に好い岩窟があるつていふぢやないか？
それは一體、何處なんだえ？』友達はまたかう訊いた。

『それが、その東の突端の地藏岬と西の突端の日の御岬との間にあるんだよ。そこを歩けば、
大したもんだけども……』

『君は歩いた？』

『いや……僕はまた行つて見ない。しかし、今だに、行けたら一度は行つて見たいと思つてゐる。』

『餘程あるのかね？ その間は？』

『里數にしたら、十五里か二十里だらう？ 精々……。美保の關から杵築までの里程と同じわけだね。丁度裏と表を成してゐるわけだから……。でも、そこを探るには、何うしたつて、一週間ぐるらはかゝるさうだ……』

『嶮しいんだね？ 餘程——』

『その代り、好いところがあるつていふよ。海山の美を盡したつていふやうなところがあるつていふからな……』

實際、今でも私はそこに行つて見たいと思つてゐた。

大社から向うにも、見るところは澤山にあつた。石見——そこは日本でも最も遠い感じのする國々の一つであるが、今では汽車が次第に出來て、自動車をさへ利用する氣なら、そのまゝ眞直に萩から下の方まで出て行くことも出來るといふことがあつた。この間もかなり温泉があつた。三瓶山の上にある志學温泉などは、中でも殊に行つて見たいものの一つであつた。温泉津の湯もわるくはなかつた。

杵築から下の關まで、中を二晩泊るゝなら、樂に其方へと出て行くことが出來た。

大阪の埠頭から毎日出帆するくれなる丸——この汽船は四國から九州までずつと航行して行つてゐるのであるが、瀬戸内海を航行する間はさう大して海も荒くなく、潮も迅くなく、まア何方かと言へば、疊の上を行くやうな海なので、この汽船に乗つて行くものはかなりにかつた。

それに、汽船の設備が好かつた。船も綺麗だし、船室も整つてゐるし、二等で行けば、横にでも何うにでもなれて、汽車で行くよりは、ぐつと樂だつた。『あの航路なら、いくら舟に弱いものでも、減多に酔ふやうなことはありません……。樂ですな……。四國から、別府の方へ行くなら、何うしたつて、あの汽船ですよ』それに乗つたことのある人達は、皆なかう言つた。

それに、夏は涼しかつた。納涼船としても立派な價值があるなどと人々は言つた。避暑地として多くのすぐれたところを持つてゐない上方の人達に取つては、成ほどそれは好い考へであるか

も知れなかつた。それに、この汽船の通つて行くところには、風景の好いところも澤山にあるし、名勝古蹟と言はれるところもかなりにあつた。尠くとも面白い航路には相違なかつた。

このくれなる丸は、大阪を出て、あの六甲の下の海を通つて、神戸に寄つて、そこで船客を乗せて、靜かに淡路島を向うに廻つて、そして讃岐の方へ行つた。

いかにも靜かな、のんきな、落附いた氣分がした。

このくれなる丸は、神戸を出てから、高松、高濱とこの二つの港に寄港するばかりで、今日の午後の二時に大阪棧橋を發するとすれば、一夜船中で過して、翌日の午後四時三十分、別府に着くやうになつてゐるのであつた。従つてあたりの風景を眺めやうとするには、やゝ物足らない感じがした。もう少しゆつくり瀬戸内海を見て行きたいやうな氣がした。來島瀬戸あたりまでは、全く夜で、あの美しい五劍山も小豆島も御手洗港も多度津も、寢てゐて通つて了はなければならなかつた。勿論、復航をすれば、さうしたところも見て通つて來られるわけではあつたけれど……で、もつと細かく見て行かうとするならば、汽船の設備はやゝ落ちるけれども、大阪細島線の

汽船に乗つて行くのも好いと思ふ。この汽船は到るところで寄港した。

この航路に當る瀬戸内海は、全く美しい。ところに由つては、こんなに好い景色があるかと思つて睜るくらゐであつた。淡路島をべりりと廻つて、高松近く行く間は、それでもさう大してすぐれたところもなかつたけれど——鳴門の方を汽船は通つて行かなかつた——五劍山が見え出して來るあたりから次第にその特色を發揮して來た。

否、それまでも仔細に探れば、いろいろな島や港や灣や瀬戸がそれからそれへと連つてゐるのであつたが——坂越、牛窓、虫明などの港もあつたのであつたが、概して汽船は岸に寄らずに沖遠く航して行くので、さうした細かい景色を一々に見て行くことは出来なかつた。で、兒島半島を右に見て、讃岐の海に行くと、島の影が急にあたりに多く、面白い形をした山が黒く且つ碧に、やがてはあの誰が見てもすぐそれとわかる屋の形をした屋島山をその海のほとりに認めることが出来るやうになつて行つた。

高松附近には見るところがかなり多かつた。例の栗林公園、屋島山、五劍山、神梯王墓、佐

藤繼信墓、平氏の築つた屋島御所の址、大門の址などがあつた。仔細に探つたなら、一日二日ぐらゐでは何うしてもかゝるであらうと思はれる。例の崇徳院の白峰の御陵などにも、行つて見やうと思へば、さう大して遠くはなかつた。それと反對の方では、津田松原などが美しかつた。汽船は小豆島の北側を航行した。従つて土の庄町の白聖をそれと指すことが出来た。しかし例の神馳の奇勝もはつきりと見ることは出来なかつた。唯、奇骨稜々とした山をそれかこれかと思はるばかりであつた。くれなる丸で来れば、こゝは大抵夜だつた。

多度津——こゝあたりに来ると、島が非常に多い。しかし、四國の方に面したあたりよりも中國に面した方に、一層島の影が多い。つまり尾の道から多度津へとやつて来る航路である。御手洗港のあるあたりは、中でもことに瀬戸内海の氣分に富んでゐた。

ある人が話した。

『實際、さういふところがあるんだよ。皆な船頭相手だね。夕方、旅舎の欄干に立つてゐると、ぞろぞろさうした女が濱邊を歩いてゐる……。何うするんだと思つてゐたら、皆な舟に乗つて、

客を引きに行くんだね？』

『何んな舟だね？』

『小さな舟だよ。傳馬の少し大きいぐらだよ。そしてかれ等は十二時近くまで海の上にあるんだからね。そしてお座敷といふのは、船の中だからね。ちよつと變つてゐるぢやないか？』

『本當だねえ』

『それも、夏とか月のある夜とかなれば、舟の中もさう苦にはならないさうだけれど、冬の夜とか、雨の降る夜とかは、たまらんさうだ……。』

『さうだらうな』

『だから、船頭が箱屋をかねてゐるので、場合に由つては、營業主が艫を漕いで行くといふものもあるさうだ……。しかし、これの流行したのは和船時代で、今では昔の三分の一にも行かないさうだ。さうした漕船も通らないではないが、多くは女房持で、子供などゐて、舟の中でちやんと一家を構へてゐるのが多いから、さういふ女を買ふのは、多くはそこに使はれてゐる船頭達

にすぎない。そしてさういふ船頭達は金を持つてゐない。親方に借りて遊ぶといふことになるから、親方始めその上さんもさういふ女のやつて来るのを好い顔をしない……。およしいよ、つまらないなど言つてとめる……。何うも、今では不景氣で、一夜中、一人の客に逢はずに歸つて來なければならぬやうなことが間々あるといふことだ……」

『つまり、昔は瀬戸内海には、さういふ遊女が澤山あつたんだね？』

『大抵はさうだつたんだね……。御手洗なんか、それでもいつまでもその風習が残つてゐる方なんだらう？ 牛窓、虫明、あそこら、皆なさうだつたんだね？』

『面白いな』

その話を聞いた私には、その港が、その夕日を帯びた白聖の港が、島と島との間の狭い瀬戸に面してゐる港が、はつきりと眼の前に浮んで來るやうな氣がした。それは、多度津から尾の道に行く間にある港であつた。

さういふ船のロオマンスは、瀬戸内海には、まだ澤山に残つてゐるだらう。時代に全く置いて

行つて了はれたやうなところもあるだらう。昔のさまがそのまゝに残つてゐて、何とも言はれない旅の思ひを煮くやうなところもあるだらう。めづらしい色彩もあるだらう。面白い船の生活もあるだらう。かう思ふと、吾々の瀬戸から御手洗港あたりまでの島や、港や、帆船や、赤ちやけた山や、ひよろ長い松などがはつきりと眼の前にあらはれて見えて來るやうな氣がした。

多度津からは、金比羅参りの人達が續々として下りた。多度津の停車場は長い町をすつと北に抜けたやうな位置にあるが、そこから金比羅まではわけなく行けた。

金比羅で驚くのは、あの長い磔道であつた。これは日本では他に何處にもないと言つて好いものだつた。行つても行つても盡きない……。もうおしまひかと思つても、また出て來る。また出て來る。しまひには、こんな長い磔道を造つた人間が馬鹿々々しくなつて來るくらゐであつた。しかし一度は善男善女に雜つて、お参りしなければ、その馬鹿々々しさがわからないといふものである。

それに、金比羅の位置が好かつた。つまり象頭山の半腹にあるのであるが、そこから見ると、

讃岐平野が一目に見えて、あの飯野山の特立してゐるさまなど何とも言はれなかつた。それは丁度菜種の花の咲くころで、ほんやりと霞のかゝつてゐる具合など、丸で一幅の畫圖であつた。善通寺は兵營町としての他に、僧空海の故郷であるだけそれだけその遺址が非常に多い。次手に下りて見ても好いところであつた。

多度津から來島瀬戸に來ると、汽船の動搖はいくらか強くなつた。岸には灣が見えて、その上に四國では一番高いと言はれた石槌山が聳えてゐるのが見える。いかにもすぐれた眺望である。そしてその海岸の少し奥には、今治港がそれと指點せられる。脇屋義助が勤王した跡もその近所にある筈である。靜かにすうと烟の颯るのが見えた。

二十九

高松に來て汽船を下りた。

そこには興居島、伊豫小富士などといふ島嶼が散點して、いかにも海山の風光のすぐれたところであつた。私は一度宇品からそこにやつて來たことがあつた。その航路もすぐれてゐた。そこには吳の軍港があつた。音戸の瀬戸があつた。島と島とが重り合ひ、帆影と帆影とが連り合つた。音戸といふ港のあたりは、殊に感じが好かつたことを、今でも私ははつきりと覚えてゐた。高濱で汽船を下りて、海岸を五六町左に行く。と、そこに汽車がある。停留場がある。これに乗れば、三十分ぐらゐで、松山の城の白堊を目にすることが出來た。

此處に來ると、いかにも四國に來たといふ感じがした。何となしに、あたりがやわらかであつた。靜かであつた。線に直線が少く曲線が多かつた。廣島あたりと比べると、春の來るのも早く、

桃が咲いてるたり、菜種の花が咲いてるたりした。三津ヶ濱の港町は、汽車の窓から遙かに見わたされた。

松山の城壁——それは妙くとも旅客の目を聳たしめるに足りた。實際美観であつた。また奇観であつた。『はア、あれが松山の城か？』誰でもかう言はずにはゐられなかつた。

今では、日本でも、完全に残つてゐる城といふものは少くなつたであらう。私の知つてゐるところでは、此處と近江の彦根も、それからもう一つ備中の福山ぐらゐるものであらう。熊本に残つてゐるにはゐるけれども、とても此處や彦根のやうに完全に残してはゐなかつた。

そこには曲輪が残つてゐた。門が残つてゐた。天主閣が残つてゐた。いかにも封建時代のさまがそれとはつきりそこにあらはれて来るやうな氣がした。

私が始めて来た時分には、まだ汽車があつただけで、電車はなく、道後に行くにも、車に由るより他爲方がなかつたのであつたが、今は汽車からすぐ電車に乗替へて、そしてそこに行くことが出来た。

道後の温泉——古いなつかしい温泉、私が初めて行つた時には、あの大湯の前の旅舎の三階の一室に、今、向うの山から出たばかりの月がさして、樹の影や、家の影や、人の影がくつきりと黒く地上に落ちてゐるが、その感じは、今だにはつきりと私の頭に残つてゐるのであつた。何うしてさういふ風に印象的に感じたかといふのに、それには理由があつた。妙くとも私は興奮してゐた。

私は廊の中にある大きな家の奥の一室の騒ぎの中からこつそりぬけ出して来たことを思ひ出した。そこには大勢女がゐて、美しい女がゐて、現にその中の一人はくじ引で自分にあてられてゐたことを思ひ出した。そして私が廁から出て来ると、その女が手水鉢のところ立つて、柄杓で私の手に水をかけて呉れたことを思ひ出した。私にはそれまでさうした知識は丸でなかつた。酒の席でさうした女を見たことはあつたにしても、さう深くまで入つて行つて見たことはこれまでも一度もなかつた。室の中では皆なは騒いでゐた。唄などを歌つてゐた。『まア、今夜はゆつくり遊ぶサ、向うにわたれば、半年はかうした面白い目に逢ひたくも逢はれないんだから……』こ

んなことを皆なは言つてゐた。私達は日露戦役に従軍するために廣島に来てゐたのであつたが、ロシアの浮屠の松山にゐるのを見るために、その朝宇品から海をわたつてやつて来たのであつた。でも私は何うしてもそこに泊りたくなかつた。何だかその女が可哀相なやうな氣がした。で、私はこつそりとそこから抜け出して来た。『まア、貴方、遁けて行つてはいけませんよ』かう言つてあとから追ひかけて来て袖をつかまえたのをも振拂つて出て来たことを思ひ出した。丁度その時、月が明るく後の山から出かゝつてゐたのであつた。そしてそれが私のゐる三階の窓にさし込んで來てゐたのであつた。

その時と比べて見ると、その次行つた時には、浴槽の設備が非常に複雑になつてゐた。二錢湯、五錢湯、十錢湯、三十錢湯などと言つて、入口が皆な違つてゐた。切符を賣るところなども出來てゐた。

初めに行つた時には、二十五錢湯と五錢湯とがあつただけのやうだつた。二十五錢出すと、三階までつれて行かれて、綺麗におつくりをした女が茶を持つて來た。何だかすぐつたいやうな

氣がした。『これで二十五錢取られるのかな、馬鹿々々しいな』と思つた。ところが、今では五十錢になつてゐる。

こゝの浴槽は、それほど見事ではないけれども、いろいろな湯があつて面白かつた。それに、何處か古風なところがあつた。

旅舎としては、無論、鮎屋が一番好いであらう。何處となく古風で、そして感じが好かつた。中澤君の畫の中にある石の手洗鉢——あそこの光線は静かで、そしてやわらかであつた。そしてその手水鉢のところから、狭い階梯を上つて行くと、向うに六疊と四疊半の帷座敷があつて、その欄干から見ると、小さくはあるがちよつとした庭が見えた。一方は崖で綠葉が深く繁つてゐた。

道後についての批評は、何方かと言へば、あまり好い方ではなかつた。ある人は『猫の額のやうなところだ』と言つた。またある人は、『いやに陰氣だね。それに何にも見るものがないぢやないか。せめて、湯でも豊富にあればと思ふが、それもあまり多くはないんだからね』と言つた。

ある人は、『まア、松山があるから持つてゐるやうなもの、關東地方では、あんなところはいつでもあるね』こんなことを言った。しかし、私には何となくなつかしかった。何もなかつたけれども——溪流の美も山の美も眺望の美も何もなかつたけれども、それでも何處か古いなつかしい感じがその町の隅々に巴渦を巻いてゐるやうな気がした。光明皇后のことなどが思ひ出されて來た。

それに、河野氏の古城跡である公園が好かつた。設備としては新しいけれど、何處かに古い感じが残つてゐて、種々な人達のことを思はしめるに十分であつた。

道後から電車で松山に行つて、そこで昔の城に登つて見るのも興味がある。

三十

高濱を出た汽船は、一直線に西南に向つて下る。右の方には、多くの島影が列なつて見えたり、帆が重り合つたり、周防の山とも思はれた山巒が時には黒く時には碧く見えてゐたりしたが、左は全く褐色の徒崖で塗られ、行つても行つてもそれが容易に盡きやうともしなかつた。

長き日を

いよの長濱

はるばると

わたりて來つる

いよの長濱

これは別府の方からやつて來て、そして詠んだ歌であつたが、實際、春の日などには、退屈し

つゝものんきな感じのするところであつた。しかし、くれなる丸は長濱には停船しなかつた。唯、眞直に別府へと向つて進んだ。

地図で見ると、あの長く海中に突出してゐる佐田の岬、それもこの汽船で行つてははつきりとも見ることが出来なかつた。しかもその汽船はその岬のすぐ下について航行して居るのであつた。

佐田岬を見るのには、何うしても別府細島間の汽船に乗らなければならなかつた。

神戸を午後五時に出帆したくれなる丸が、いよいよ別府の灣内へと近寄つて行くのは、そのあくる日の午後四時過ぎであつた。次第に帆影が多く見えて來たと思ふと、一番先に、左に一抹の陸地を見た。それは矢張褐色をした徒崖であつた。

長い航海に倦んだ乗客は、別府が近いといふので、皆な甲板の上へと出て來てゐた。

『はゝア、あれか佐賀の關ですか？』

『ぢや、もうすぐですな』

『そら、向うに山が見えるでせう？ そら雲のかゝつた？ 高い？ あれか由布岳ですよ。あの

下に別府があるんですよ』

こんな言葉がそこからも此處からも起つた。誰の胸にも新しい土地に對する喜悅が滿ち溢れた。午後の日影は明るくあたりの海を照した。

少し経つと、今度は反對の方に小さな島があらはれて來た。

『あれは？』

『あれは姫島です。あそこには海底電信の局がある筈です』

『その向うは？』

『あれは國東半島です……。そら、もう見えて來たでせう。別府が……。？ 山の下のところにごたごたと人家が集つてゐるでせう？』

『あ、あれですか？』

『さうです……。あれが別府です？ あの一帶の地がすべて温泉で滿ちされてゐるのです……。』

『濱脇は？』

『それはちよつと左になつてゐます……。そら山が見えるでせう？ 丸い山が、低いけれど獨立した山が——？』

『え、え』

『濱脇はあの山の右になつてゐます。あの山は四極山と言つて、大友の古戦場です。あのわきを大分に行く電車が通つて行つてゐます』

『ぢや、大分は、もつと左になつてゐるわけですね？』

『さうです……すつと左です。此處からはまだ見えてゐない……』

舵機の廻轉する毎に、次第に人家も瓦葺も、全體の感じもはつきりして行つた。それはいかにもすぐれた風景だつた。美しい海だつた。鶴見山もはつきりと見えて來た。

鷗の群が何羽となく海の上を飛んでゐるやうになつた時には、最早温泉旅舎の二階三階もはつきりと手に取るやうに見え出して來てゐた。

始めて此地に上陸した旅客は、海岸通りの、埠頭近い旅舎に引懸らすに、眞直に日奈子なり、一

米屋なりに行くのが好いであらう。一先づそこに腰を落つけて、それから何處へなりと行つて見るが好いであらう。

しかし初めての旅客には、汽船の甲板の上から見たのに比して、別府の町の汚く且つ不整頓なのに目が附くであらう？ 『別府、別府と言ふから、もつと町並などの揃つたところだと思つた

のに、何んだ！』などといふ嘆聲も出るだらう。しかし、それは最初の感じだけで、段々ゐる中には、成程好いところだ！ 好い温泉場だ！ といふやうになるに相違なかつた。

だから、別府に來て、別府にだけ落附いてゐてはつまらなかつた。濱脇にも行き、觀海寺にも行き、鐵輪にも行き、龜川にも行つて見なければ駄目であつた。湯は到るところから湧き出した。

龜川の手前の川などは、全く温泉になつてゐるところなどもあつた。

賑やかな點から言つたら、別府よりも、濱脇の方が賑かでもあり、温泉場らしくもあつたかも知れなかつた。そこには混雑と浴舎が連つてゐて、旅藝人なども多く集つて來てゐた。そこにある砂風呂にも一度は是非入つて見なければならなかつた。あまり心持の好いものとは思はれなかつ

たけれども——。

別府で一番上品な、都會人向きの温泉と言へば、矢張、觀海寺あたりであらうと思はれた。それは別府からいくらもなかつた。せいぜい三十町ぐらゐのものだつた。そこは別府から比べると、位置がぐつと高くなつてゐるので、二階、三階の室々からは、一目に美しい海が見えて、何とも言はれない好景であつた。それに、設備もかなり完全に出来てゐた。

こゝかちすつと地獄めぐりをするのも興味があつた。鐵輪温泉にも一夜泊つて見る方が好かつた。

それから、私はあまり詳しいことを知らないけれども、これから一里か二里、山の中に入つて行くと、面白いところが非常に澤山あるといふことであつた。それに、山から見た海の美しさは、到底、口や筆ではあらはすことが出来ないものであるといふことであつた。例の別府名物として販賣されてゐる竹細工——その材料の細い竹が山奥に一面に密生してゐて、毎年それを伐るのにも、ちやんと日をきめて、村々の收得區域も争ひの起らぬやうにきめて、それから一齊に刈ると

いふ話であつた。長年別府にゐて、その案内記を書いたUといふ人は話した。『別府はまた開かうと思へば、いくらでも開けますよ……。箱根、あそこなどよりも、もつと規模が大きいですからね？ 湯の方から言つても、山の方から言つても……。私、一度探險に出かけたことがありますけれども、鶴見山の奥の方にも、非常に湯の澤山出るところが御座いますよ。あそこなんか、開きさへすれば、箱根の強羅ぐらゐのものには、ぢきなつて了ふと思ひましたよ。何しろ、山の何處からでもあの海が一目に見えますからね。上にのほればのほるほど、眺望が大きくなつて來ますからね……。ですから、別府はいくらでもひらけますよ。何んなに立派な温泉郷になるかわかりませんよ。現に、年々夥たしく發展して行つてゐますからね。十年前と今では、丸で違つたところのやうになつてゐますからね』

成ほどそれに違ひなかつた。單に温泉地としての位置から言へば、日本でも一番規模の大きなものであるに相違なかつた。であるから十分な設備さへ出來れば、九州から、中國から、四國から、上方から、更に遠く朝鮮滿州から、上海香港から旅客を引き寄せることは決してさうむづか

しいことではなかつた。避暑地としても、避寒地としても、この地に及ぶところはなかつた。

それに、この附近には、長く滞在する旅客をも倦ませないだけの遊覧地が澤山にあつた。先づ電車で大分市に行けた。そこには函荇灣を前にした美しい松原などがあつた。史蹟では、秀吉の先鋒軍として一番先に此處に入つて来て、島津と戦つて戦死した長曾我部信親の古戦場とその墓とがあつた。大分から竹田を通つて熊本の方へ延びて行く汽車は、まだすつかり完成はしないけれども、これが通じた曉には、半日足らずで、阿蘇山にも、その阿蘇の麓に散在してゐる温泉にも遊びに行くことが出来た。

これと反対の方面では、日出に大きな蘇鐵のある寺があつたり、宇佐神宮がわづかに四五時間往復が出来たり、もう少し遠く一日、もしくは二日を費せば、中津から耶馬溪の谷深く入つて行つて、新耶馬溪まで探り盡して、柿阪の山村あたりに静かに一夜泊つて歸つて來ることが出来た。英彦山あたりまで入つて行くのにも、さう大して面倒ではなかつた。

三十一

『さうだね、成ほど、さう言へば、九州の二大温泉地をつくる事が出来るね？』

『九州ばかりぢやないよ、日本でも立派なものになるよ』

『さうだな、規模が大きいからな』

『さうすれば、いくらでも、外國人を引くことが出来る。否、それ以上に海外で成功してゐる成金を引寄せることが出来る……。現に、今でも、夏になると、上海、香港、もつと南から、小濱あたりに外國人がドシドシ避暑にやつて來るんだからね——』

『さうだつてね？』

『だから、小濱は何うしても、別府と東西相對して、立派な温泉地を成すに違ひないと思ふね。』

何しろ、南から船で長崎に着いて、それから峠を一つ越せば、茂木から汽船がいつでも出るんだ

からな……』

『便利だな……。それに、温泉岳の温泉が、近年、非常に發達したつて言ふぢやないか？』

『だから言ふのさ……。小濱だけでもかなりな温泉なのに、あの上の温泉岳の温泉か素敵だらな……。何しろ、あそこらは、九州でも一番、海の美しいところだからね』

『本當だね』

『何しろ、まア、想像して見たまへ。暑い暑い南から來て、あの長崎の裏の小さな港から小濱へとやつて來る心持の好さを——。それや内地人では、さう大して好いとも涼しいとも思はないかも知れないけども、外國人であつて見給へ。何んなに愉快に感ずるか知れやしない。その靜かな涼しい碧い海をお伽話の中のシインのやうに思ふかも知れない……。また、丸で別天地の極樂に來たと思ふかも知れない……。實際、外國人の話だが、長崎から小濱に來ると、丸で生きかへつたやうな心持がするさうだからね——』

『さうだらうな……。あそこところは好いからな——』

『ちよつと九州の一角ではないやうな氣がするからね。第一、あそこらは九州の西海岸の粹をつくしてゐるやうなところだから……。島原半島も向う側はあまり好くない、何うしても千々岩から口の津あたりまでが一番好いんだから……。海も有明の海は色がわるいが、あそこはもう深いからね。實際、温泉のあの眺望の好い旅舎にゐては、熱帯の暑さなんか何處かに行つて了つたやうな氣がするに相違ない——』

『さういふつもりで、設備がしてあるにはあるんだらう？』

『それはさうだけでも、まだ十分ぢやないね……。年々盛にはなつて行くやうだけでも——』

『おかしなもんだな。位置といふものは？ あそこなんかでも、二十年前には、あんなに開けて立派になるとは思はなかつたんだが……。田舎の小さな温泉場だつたんだがな。武雄あたりよりも、もつと振はなかつたんだがな』

『それを思ふと、位置といふことは、大切なことだね？』

『本當だ』

『それに、あの小濱の旅舎のすぐ海に面してゐる形が面白いぢやないか。』

『さうだね？ 汽船が来て、すぐ前にとまるね……？ ちよつと繪のやうなところがあるね？』

『二階で見ると、すぐ下の方を舟を通つて行くからね』

『何しろ、温泉は好い。山としても立派だし、海としても、ちよつと他に類がないくらいだ……。あそこがもつと開けて、別府と一緒に、世界の温泉地となるやうな時がきつと来るよ。それは、今から僕が豫言して置いてもいい……』

『その豫言はいつか中るね……』

『それは中るとも、きつと中る。或は別府よりも、もつとハイカラな、外國式のものになるから知れない。あの長崎の裏の港から、白いランチが隼のやうに飛ちがふ時代が来るかも知れない。さうなると、きつと、あの小濱と温泉との間にエレベーターが出来て、すぐ一呼吸に旅客を温泉に運ぶやうになるかも知れない……』

『さうなると面白いね……。誰か、金を出して、今からさういふ計畫をするものが出て来ない

かな……』

『ちよつとそこまで目先のきくものはありませんから……。鼻の先のことばかり考へてゐるやうな世の中だから……。出来て見て、はじめてびつくりするやうなもんさ。あは、』

『何うしてもさういふことになるね。あとから智慧が出て来るもんだからね……。さういふ形から言ふと、矢張別府の方が先に開けて、それから段々、さういふ氣運が促進されて行くやうになるでせうね』

九州では温泉岳の周圍——そこが一番見物だ。幹線の汽車の中から、長崎へ行く汽車の中から、長崎の裏の茂木の港から、口の津から、天草の富岡港から、何處からでもその美しい温泉岳が見えた。そしてそれにはいつも海が添つてゐた。徒崖が添つてゐた。岬が添つてゐた。帆影が添つてゐた。

『それで、その温泉岳を見るには、一番何處が好う御座います？』

『まあ』

私は返答に困つた。

『有明の海ですか？』

『まあ……。何處から見ても美しいのだから、ちよつときめて言ふわけには行かないけれども、

私の見た中では、三角線の汽車の中など、殊に美しいと思ひました。』

『三角港からですか？』

『あそこからも見えるけれども、もつとこつちで、宇土から岐れて、ずつと海岸に添つて行く
と、丁度それが夕方で、その温泉岳のかけに日が落ちて行つた。そしてそのあとの雲の色彩の美
しかつたことと言つたら、何とも言はれませんでした——』

『さうでせうな、あそこから見たら好いでせうな』

今でもその雲の色彩は私の眼の前にあるやうな気がした。或は赤く、鼠色に、紫に、白に、褐
色に、言葉で言ひあらはさうとしても容易にあらはせない色彩が、もくもくと簇つたり消えたり、
高く颯つたりしてゐるさまは、全く他では容易に見られないものであつた。私はじつとそれを見
詰めた。自然といふものは、これほどまでに美しいものかと思つて、じつとそれに見入つたこと
を思ひ出した。と、急に、汽車は山の中に入つて行つた。今まで見えてゐた温泉岳の姿は掻き消
すやうに見えなくなつて了つた。しかし、山の姿は見えなくなつたけれども、その上に巻き颯つ

た赤い、白い、鼠色の雲の色彩ははつきりと見えてゐて、あそこが温泉ヶ岳だなといふことは、
それと指さされた。際崎の停車場に行つた時は、最早全く夜であつた。

天草からも温泉はよく見えた。手に取るやうに見えた。ことに、口の津の港上を航行する汽船
の甲板の上から見たのは、私には忘れ兼ねた。富岡港の港外にある松林を前景にした眺めもまた
『温泉百景』のすぐれた一つであらねばならなかつた。

九州の旅では、この他に、阿蘇が好かつた。あそこは是非行つて見なければならなかつた。宮
地に行つて、阿蘇神社に参詣し、引戻して坊中から登山する。基盤としては、阿蘇は世界にもめ
づらしいほど大きい火山であるが、登るのは、わり合に骨が折れない。下駄ばきでものほつて行
かれる。黒い、白い、鼠色の烟を前にしながら、丸い山の路を一步々々のほつて行く感じは、ち
よつと他には得られないものであつた。

それにあの噴火坑の大きな感じは、たしかに日本的と言ふよりも世界的と言ふべきものであつ
た。そこまで登つて行つたものは、唯僅若として後に倒れるばかりであつた。急には言葉も出

ないほどの偉観であつた。

一夜を戸下温泉に泊る。遠くに水の音がして、いかにも静かに好いところである。九州にはたんとない山の中の温泉といふ氣がした。

この阿蘇は、前にも言つた通り、九州中央線の汽車が完成すれば、非常に大分別府方面から開けて來るであらうと思はれた。尠くともその方面から、阿蘇に遊びに來るものが非常に多くなるであらうと思はれた。

筑前肥前あたりにも、温泉の分布は二三あつた。太宰府に行く二日市の停車場のすぐわきにある武藏温泉、あそこは平野の温泉として、春などはちよつと好かつた。旅舎の垣一重は麥島で、雲雀の聲が終日高く空に響つてゐるのがきこえた。

武雄は湯の分量が少なかつた。それに、土地としてもわるく俗化してゐる。九州では、曾つては聞えた温泉であつたけれども、今は別府と小濱とにすつかり壓された形になつて了つた。

汽車からは少しく離れてゐる嫌ひがあるけれども、長崎街道をすつと押し詰めて、多良岳連峰の峠にこれからかゝらうとするところに、嬉野温泉といふのがあつた。昔はこゝは長崎に行く往還の要衝に當つてゐたので、かなりに繁昌したところらしく、橘南谿の『西遊記』などにも、此處で靜かに上手な三味線を聞いた話などが書いてあるが、そこに行つた人の話では、武雄などよりも、湯も多く、設備もかなりに出來てゐるので、わざわざ出かけて行つても、決して後悔するやうなことはないといふことであつた。私はまだ行つて見たことがなかつた。

熊本から南に行つては、八代の先に日奈久温泉があつた。これは海に添つた、いかにも南國らしい、密柑などの黄熟してゐる、田舎の人達のよく出かけて行く温泉であるが、さうかと言つてわざわざ出かけて行つて見るほどのものでもなかつた。唯、靜かに旅のつかれでも醫さうとするには好いといふぐらゐなものだつた。矢張、昔、鹿兒島街道の雑踏した時分に榮えた温泉場の一つであつた。

玖磨川の川舟、それは今は汽車に變つた。今では、あの急な流れを、萬山の中を凄しく落して來る流れを、汽車の窓から首を出しながら眺めて行くことが出来るやうになつた。しかし、矢張、

人吉からあの川舟を仕立て、四十八もあるといふ急瀬を下つて見なければ、本當のことはわからなかつた。せめて白石あたりまで下つて見ることを私は旅客に勧めたいと思ふ。

人吉の近所に、林温泉とかいふ湯がある筈であるが、私は行つて見たことがなかつた。

矢嶽トンネル、ルウブ式——そこらはいかにも山の中だつた。萬山の中だつた。雲は湧いては消え、消いては湧いた。遠く玖磨川の潺湲も手に取るばかり見えるやうな気がした。

汽車は大隅から薩摩の方へと入つて行つた。

三十三

やつと私達は下りて来た。

『まア、好う御座んしたね？ 此處まで来て？』

『本當ですな』

かう相手の男は溜息をついた。

『何しろ、案内者が案内者の役に立たないんですから、困りましたよ。案内者が先きに眞青になつて了ふんですもの』

『本當でしたな』

そんなことを後で言はれてゐるとも知らず、案内者の男は、大きな包を負つて、先へさつさと歩いて行つた。

『本當に、一時は何うなるかと思ひましたね？ 一間先も見えなくなつて了つたんですもの？』

222

そして路がなくなつて了つたんですもの——』ちよつと間を置いて、『あれで、眞直に下りて行つて了へば、今時分は、噴火坑の眞中に落ちて了ふところでしたかね？』

『まあ、本當に、命拾ひをしたやうなもんですな。あの凄しい噴火坑の音はまだきこえるやうですな』

『あの時、休んだのが好かつた。休まなければ、何うなるかわからなかつた……。案内者なんて言つて、何にも知らないんだからな。無責任な奴さ……。奴について行けば、今時分は何うなつてゐたかわかりやしない』

私達はこんな風に話した。私達は今朝祓川からこの霧島へと上つて來たのであつた。途中、馬の背越でもえらい眼に逢つたが——下に千仞の谷を見て辛うじて石につかまつて上るやうなえらい目に逢つたが、更に高千穂の頂上から噴火坑の方へと下りて來るところで、深い深い一間先も見えないやうな霧に逢つて、一時は全く下りて來る見當を失つて了つたのであつた。またまたい

まごすれば、凄しい噴火坑の中にのめり込んで了はなければならぬのであつた。それをやつとのことで、一度失つた路をさがし出して、そして辛うじて下りて來たのであつた。そこまで來ると、霧はすつかり晴れて、櫻島の碧い海がはつきりと手に取るやうに見えた。

『あゝ、櫻島だ——』

『好い景色ですな』

私達は思はずかうした言葉を取交した。

それからまた少くとも十二三町は下りた。ひた下りに下りた。漸く山と山と重り合つた谷のやうなところへと出て來た。疎らな灌木の林があつて、草の下には冷めたい水が流れてゐた。案内者はそこに荷物を下した。

『お山は何うもおつかねえ——？』

かう案内者はひとり語のやうに言つた。

『滅多に上つたことはねえんだな？』

223

『あるにはあつても、お山はあらたかだで、後生のわるいものがのほると、すぐあれるでな……この間も西洋人がのほつたら、好い天気だつたのに、急にあれ出して、三人死んだ』
私は同伴者と顔を見合した。『後生がわるかつたわけだね？ さうすると——』

『さうだな』

同伴者も笑つた。案内者は平気ですましてゐた。

私達も冷めたい水を掬んで飲んだり、食む残しのむすびを出して食つたりした。私達はこれから榮の尾温泉へ行かうとしてゐるのであつた。

『もうぢきかね？』

かう私は訊いた。

『温泉までだけえ？ そんなもんだんべい……。此處からは、もう一人でも行けるだがな……。おめいさまがた、此處で、許して呉れねえかな？』

『許してつて？』

『おり、温泉まで行つちや、歸りがおつくうになるで、此處でお暇していだがな……。いけねかな？』

私達は顔を見合せた。こゝで、この案内者に通けられては、それこそ大變だつた。私は聲を高くした。

『だつて、約束ぢやねえか？』

『約束は約束だが——俺ア、おつかなくなつたでな』

『馬鹿な』

『な、さうして呉ろや』

『そんな馬鹿なことが出来るか……。約束だ』

押問答の揚句、やつと今夜の泊賃だけ餘計にやることにして、そのまゝそこから出かけた。草原が草原に續いた。

それは林があつたり、丘があつたりするやうな面白い山路だつた。をりをり碧い碧い海が盛氣

樓か何かのやうになつて見えたと思ふと、それがまたすぐ隠れて了つた。

山の裾のやうなところをぐるぐると廻るやうにして歩いて行つた。日はまともに上から照るの
で——蔭といふ蔭もないので、汗はだくだくと額から流れ落ちた。振返ると、今下りて來た霧島の
噴火坑から黄い烟の颯つてるのが歴々と手に取るやうに見えた。

水の音は微かにきこえて來た。樹立が多くなつて來た。次第に谷合のやうなところへと入つて
行つた。向うに二三軒人家が見え出して來た。

『あそこか？ 温泉は？』

『さうだ——』

かう案内者は點頭いた。しかしその向うの人家まで行くのが容易でなかつた。私達は谷をもう
一度上つて、更に山の裾をぐるぐると一めぐり廻らなければならなかつた。

やがてそこに榮の尾温泉が來た。靜かな、靜かな、いかにも山の中に埋れ盡したやうな温泉場
が——。

三十四

この霧島の裾には、この他に連太郎温泉などといふのがあつた。それから幹線の鐵路に添つて、
嘉例川の近所に、日當山温泉といふのがあつた。これは西郷隆盛が獵の歸りなどによく泊つたと
ころださうだが、全く田舎の温泉場で、水車が廻つてゐたり、柴垣が取廻してあつたりした。旅
舎と言つても、普通の民家のやうな宿が多かつた。

これから海岸に向つて下る。例の國分には、この地方の古社鹿兒島神宮がある。その向うはす
ぐ海で、一路が遙かに都の城の方に向つて、海岸を縫つて、徒崖につゞいてゐるのが見わたされ
る。昔は此處から鹿兒島に向つて船が出た。「西遊記」を見ると、その船中で、喧嘩が始つて、劍
を抜いた旅客があつたことなどが記されてあつた。しかし今は汽車のレイルがその丸く深く入込
んだ海岸に添つて走つて、加治木から重富の方へと行つた。そこらあたりはことに風景の好いの

できこえたところで、櫻島はすぐ眼の前に、碧い海には帆が大きなスワンか何ぞのやうに浮んで、車窓から眼を離すことが出来ないくらゐであつた。やがて櫻島が右から左へと移つて行つた頃、鹿兒島市の萬葉は盛氣樓か何ぞのやうに美しく見え出して來た。

鹿兒島から南には、鰻池火山群が起伏してゐるために、温泉は各所に湧出して、立派な一箇の温泉郷を成してゐるのであつた。鹿兒島に一日二日滞在して、城山のあとでも見て、それから汽船で、そつちへと行くことにする。この汽船の甲板の上は、ちよつと景色が好い。櫻島がいかにも美しい。また、大隅の海岸線の長く佐多岬の方まで連つてゐる形もわるくはなかつた。小さな島なども二三あつた。で、指宿に行つて汽船を下りる。そこは到るところ温泉地で、再び別府に來たかといふやうな氣がした。

旅舎などにも大きなものが多かつた。それに、温泉の量も多く、何處の旅舎にも内湯のないものはなかつた。唯、いかにしても田舎で、風俗も違ひ、言葉もわからず、到底長くるる氣にはなれないやうな温泉であつた。

汽船は山川港まで行く。そこにも立派な温泉がある。ある畫家の話では、その薩南地方には非常に見るところが多いといふことであつた。その人は話した。「さうですね。細かに見たら、一月ぐらゐる歸つて來られませんか……。え、ありますとも、描くやうなところが——？ 温泉だつて、指宿、山川、すべて特色に富んでゐますよ。それは綺麗といふわけには行かない。都會人などには、ちよつと困るやうなところもある。しかし、古風な好いところがありますね。何處か普通の感じと違つたところがありますよ。それに、あそこらには風景の好いところがありますからね。第一、あの開聞、あの開聞ヶ岳が何とも言はれませんか。山川からその裾を通つて、池田湖の傍に出て、そして真直に海岸を枕崎あたりまで行つて見ると、かうしたすぐれた勝景を何故人が放つて置くかと思はれるくらゐですね。池田湖に映つた開聞も見事ですなね」

『坊の津の方まで行きましたか？』

『え、行きました。あそこいらも面白いですね。薩摩からは、海外に行くには、皆なあそこから出て行つたと言ふが、いかにもさうした外國に向つた港らしい氣分がありますよ。平戸とか、

長崎とか、または博多とか言つたやうな気分が……。僕はあれからずっと北の方へ出て行きました。だが、その時分は、車か、馬車か、徒歩か、その三つでしたけれども、今は汽車が出來ましたからね。鹿児島まで行つたものは、そつちに入つて行くのもわけはありませんよ……。」

三十五

「私の心を誘ふ温泉がまだ一つ残つてゐた。」

「それは何處です？」

「中國の下の關から少し此方に來た山の中ですがね？」

「あんなところに温泉がありますかね……？」

「僕も丸で知らなかつたんですがね。『温泉めぐり』に書いて置かなかつたものだから、わざわざ

知らせて來て呉れましたよ」

「何處です？ それは何？」

「何でも、長府から入つて行くらしい。五六年前までは、軌道も何もなかつたので、全く地方的温泉として、普通には知られなかつたらしいんです。しかし非常の效能のある湯だ。靈湯だと

言ふので、わざわざ遠いところを馬に乗つたり何かして、はるばる出かけて行つたものらしいんです——』

『長府からつていふと、北に入るんですな？』

『さうです？』

『成ほどさう言へば、あそこに軌道がわかれて行つてゐるやうだ……』

『つまり、中國山脈を横断して、裏日本の油谷灣の方へと出て行くところですよ』

『正明などといふ町のある？』

『さうです、さうです——あそこまで行かないんです。あの手前です……』

『さうですか、あんなところに温泉があるんですか？』

『あの街道から少し左の山の中に入つたところですよ』

『つまり、中國山脈の中にある温泉ですね？』

『中國山脈と言つても、あそこいらに來ると、山はもう低いですからな。全く末梢ですからな。』

丘の中ですか、まア』

『それで、その軌道は何處まで行つてゐるんです？』

『丁度、その中國山脈の此方側のところまで行つてゐるんです……。だから、そこから峠にかかつて、峠と言つたつて、東北地方のやうなそんな高い峻しいものではありません。馬車も車もたしか通ふときいてゐます。この峠が一里半、それから左に川について入つて行つて一里半、つまり三里に少し遠いくらゐるでその温泉につくのです？』

『何ッていふんです？ その温泉は？』

『依山温泉——』

『湯は澤山あるんですか？』

『澤山あるらしいです。僕はまだ行つたことはないから知らないけども、旅舎なども大きいのが澤山あるやうです……。面白い温泉らしいですよ』

『へえ、それは是非行つて見たいですな……。それは、あの幹線の小月からわかる湯田温泉』

などよりは、餘程おもしろさうですね？」

『それは丸で違ふでせう。湯田は往還の途中にちよつとある温泉だし、それは草津とか、有馬とか、伊香保とか言ふやうに、温泉村を成してゐるんだから……中國の草津だなんて言ふものもあるさうですから……』

こんな會話を私はした。私にはいろいろなことが想像された。先づ一番先に長府附近のその山槽が眼に見えて、その中に、その翠微の中に、烟をあげて走つて行く小さな汽車が想像された。

ついでその軌道の終端驛——さびしい、新開の、そこに、馬車だの、車だのの客を待つてゐる小さな終端驛が想像された。そこらに行くと、最早、中國山脈は近く近くその翠微を落して來てゐるだらう。嵐氣も饒くなつてゐるだらう？ 溪流もその美しい潺湲を見せてゐるだらう。雲もすぐその足元から湧き上るだらう。で、車なり徒歩なりで、その一里半の峠を越すとする。末梢にはなつてゐるとは言へ、兎に角日本の本州島の脊梁山脈である。そこにはいろいろな世離れたためづらしい感じを持った谷や峠や山槽があるであらう。春ならば鶯は啼くであらう。蕨が萌

えるであらう。秋ならば樹々の紅葉が美しく谷といふ谷を蔽ふだらう。小鳥が鈴のやうな聲を立てゝ鳴くだらう。かう思ふと、私はすぐにも出かけて行つて見たいやうな氣がした。

そればかりではなかつた。そこには大内義隆の弑された古蹟がある筈であつた。またそれに縁故を持った大きな寺がある筈であつた。否、その他にも、温泉の分布が二三あつて、一週間や十日ぐらゐる滞在しても、倦むやうなことはないらしかつた。私の眼には、谷に架し溪に臨んだ温泉の村の參差として連つてゐるのがはつきりと映つて見えて來た。

大正十一年二月二十日印刷
大正十一年二月二十五日發行

温泉周遊西の巻
〔定價金四圓五拾錢〕

著者

田山 錄
中澤 弘
光 彌



發行者

東京市神田區表神保町十番地
福岡 益
雄 助

印刷者

東京市牛久區早稻田鶴卷町三二六番地
谷口 熊之助



印刷所

早稻田印刷株式會社

發行所 東京市神田區表神保町十

金

星

堂

電話神田(三八五三番)
振替口座東京(三八三二八番)

394

232

終